



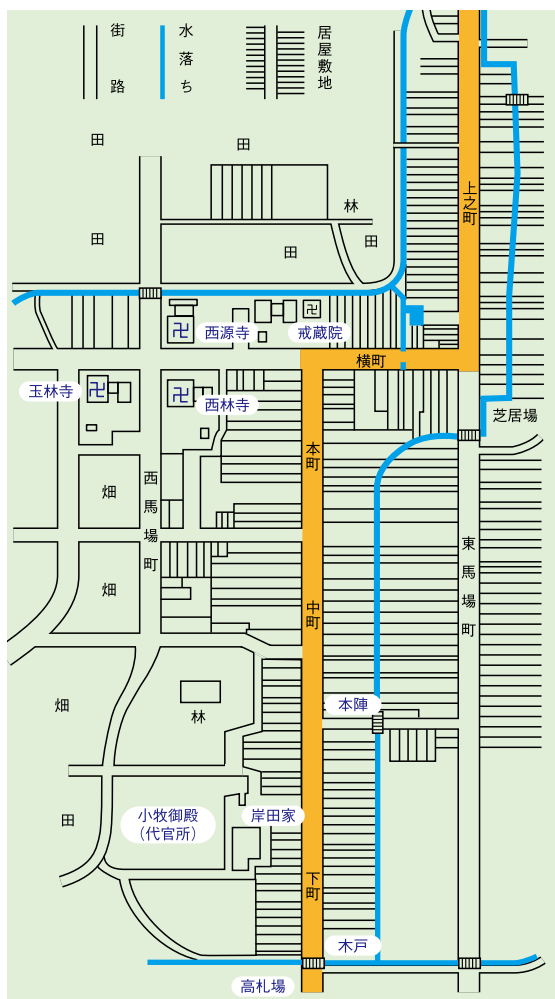
小牧山

戦国に馳せる

小牧市文化財保護審議会委員

第23回 尾張藩と小牧の江崎家

入谷 哲夫



▲小牧宿概要図

江崎家は代々小牧山守を命じられた家柄で、小牧のまちを語る時欠かせません。

上街道と小牧宿

藩制の基礎を固めた初代尾張藩主義直は、小牧発展史に大きく関わりました。

木曾の山・美濃三万石に加えて美濃五万石の加増を受けた義直は、新領管理のために、江崎宗度(ひねだ)に命じて上街道(木曾街道・中山道に直結)の築造と小牧宿の開設を行わせました。宗度は下町、中町、本町、横町、上町、寺町と町割をし、本陣と脇本陣、問屋を中心に、伝馬も備え、参勤交代に利用できるように小牧宿を整えました。また、別荘を提供し小牧御殿も造りました。

二代光友(みつとも)は、寛文7年(1667)無利息で150両を下付し、駒市の開設、日市、芝居、茶屋女を許可し、祭りと合わせて宿振興を図りました。宝暦の頃(1751~1763)の宿絵図を見ると、うどん屋、酒屋、紺屋、旅籠、古着屋、干物屋が軒を連ね、時代小説そのままの宿場の姿がありました。百姓家が多いのも小牧宿ならではです。

三用水と新田開発

寛永5年(1628)江崎了也(りょうや)(宗度の嫡子)等入鹿六人衆は、入鹿池構築を企図し成瀬隼人正(はやおのしろう)に出願して藩主義直の許可を得ました。寛永9年に着手された入鹿池構築は、幾多の困難を克服して池は寛永10年に完成、その後開削された入鹿用水は犬

山・小牧・春日井の田地を潤しました。この用水成功は、引き続き古木津と新木津用水開削へと引き継がれ、この三用水の恩恵を受けた村は39箇村に及び、新田開発が積極的に行われました。

所付役人がいる小牧代官所

九代宗睦(むねちか)は、幾つかの藩政改革をしましたが、小牧に関しては小牧御殿を改築して代官所にし、郷宿も置いて常駐の代官と手代、同心を住ませ、蔵入地や給知を所管させました。

岩崎山の石と小牧山の竹材

名古屋城の築城の際には岩崎山の石が多数切り出されましたが、宝暦2年(1752)に八代宗勝が傾いた天守閣修理をした時も大石36個が切り出されました。

また、天保6年(1835)の江戸市ヶ谷の尾張藩邸の普請にあたっては小牧山から竹3万本が運ばれました。江戸時代を通じて、江崎家が小牧山の周囲を竹垣で囲んで入山禁止を徹底し、保護していましたが、良質の竹材が大量に切り出されました。秋の一日、御掃除日を設定、遠近13箇村の男女が奉仕したのも役立ちました。

問合せ 文化振興課 ☎76-1189